

司式 熊田雄二牧師
奏楽 大日南苗香姉妹

前 奏
開 会 招 詞

* 賛 美 歌 2:1 主の御いつと御栄えとを

主の御いつと御栄えとを 声の限り讃えて
またき愛と低き心 御座にそなえひれ伏す アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書3 罪の告白②

主なる神よ、あなたの御前に背きの罪を告白します。わたしは聖なる戒めに従わず、失われた羊のように迷い出て、思いと言葉と行いにおいて罪を犯しました。しなければならぬことをせず、してはならぬことをして、自分の身に、あなたの怒りと裁きを招きました。憐れみに富んでおられる父よ、罪と過ちを悲しむわたしに憐れみを注いでください。神の独り子である救い主の名によって、わたしを赦してください。聖霊の恵みによって、わたしを新しく生まれ変わらせてください。願わくは今から後、み栄えのために生きる者とならせてください。

主イエス・キリストの御名によって。アーメン。(詩編32、イザヤ53、ローマ7)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

- あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
- あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
- あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
- 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
- あなたの父と母を敬え。
- あなたは殺してはならない。
- あなたは姦淫してはならない。
- あなたは盗んではならない。
- あなたは隣人について偽証してはならない。
- あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 2:2 委ねまつる我が重荷を

委ねまつる我が重荷を 主は代わりて負いたもう
悩み多き世の旅路も 主のいませば安けし アーメン

共同の祈禱 祈禱書7 カルケドン信条（キリストの二性一人格）

三位一体の第二位格である神の御子は、まことの永遠の神であり、み父と同質・同等でありながら、時満ちて、人間の性質を、それに属するすべての固有の性質や共通の弱さと共にとられ、しかも罪はなかった。彼は、聖霊の力により、処女マリアの胎に彼女の本質をとって身ごもられた。

そこで、二つの十全で区別された性質、すなわち、神性と人性とが、変換・合成・混合することなく、一つ的人格の中に、分離できないように結合されている。この人格は、まことの神またまことの人であり、しかも一人のキリスト、神と人との間の唯一の仲保者である。（ウエストミンスター信仰告白8章2節によるカルケドン信条：451年）

献 金 （黒）教会活動 （赤）国際ギデオン協会 70

今ささぐるそなえものを 主よ きよめて うけたまえ アーメン

聖書朗読 ルカによる福音書9章28～36節（新約聖書123頁）

説教・祈禱 「これは私の子、これに聞け」 熊田雄二牧師

* 賛美歌 59：1 我が行く道いついかに

我が行く道 いついかになるべきかは つゆ知らねど
主は御心なしたまわん 備えたもう 主の道を
踏みてゆかん ひとすじに アーメン

* 主の祈り 祈禱書1

天にまします我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪をおかすものを我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 65 父・御子・御霊の

父・御子・御霊のおお御神に
ときわに絶えせず 御栄えあれ 御栄えあれ アーメン

* 祝 禱
後 奏 （黙禱）

報 告 古澤純一長老（司会・受付 次週：門脇献一長老）

本日 受付 1階：長尾牧執事 2階：加藤良明執事 / 動画：大日南信也執事 録音：雨宮信長老
次週 受付 1階：加藤良明執事 2階：森永美保執事 / 動画：門脇光生兄弟 録音：森永翔馬兄弟

I 非常に不思議な光景

28節「この話をしてから八日ほどたったとき」。マタイ福音書では「六日の後」と言っています。ペトロのキリスト告白とイエスの受難予告から六日か八日です。なぜ日数が違うのか、よく分からないのですが、ユダヤ人マタイとローマ人ルカとではカレンダーが違うのかもしれませんが、だいたい一週間です。

ちょっと気にはなりますが、大きく気にかけるべきことは、なぜ、小見出しの「イエスの姿が変わる」記事が必要かです。不思議な場面ですが、なぜ、モーセとエリヤの登場が必要かです。これは、マルコ・マタイ・ルカの共観福音書が皆、記録した重要な出来事です。

場面は「高い山」ですが、マタイによると「フィリポ・カイサリア地方」ですので、イスラエルの北の方にある高い山です。聖書によく出てくる山で言えば、レバノン山脈のヘルモン山です。ヘルモン山は3000m近い山です。しかし、「高い」「低い」は主観的表現で、お婆さんから見れば300mの山でも高いし、山男から見れば3000mの山は低いでしょう。ここでは特定のどの山とも言わずに、ただ「高い山」と言うこと自体に意味があります。高ければ高いほど、神の御子キリストの天上の姿を想像するからです。

もう一つの舞台設定ですが、なぜ、ペトロとヤコブとヨハネだけを連れて行かれたのでしょうか。イエスの出来事に関する目撃証人として、よくこの3人を連れていかれます。この3人に共通しているのは、ガリラヤ湖の漁師たちということです。「神を見たら信じる」と言ったフィリポとは違うのです。「イエスの脇腹に手を入れ、釘あとに指を突っ込んだら信じる」と言ったトマスとも違います。疑い深い弟子たちと違うのです。また、熱心党のシモンとイスカリオテのユダは、ユダヤ民族の王が英雄ダビデ王の姿で現れることを期待する政治的右翼です。マタイは税金取りでやや微妙ですが、彼自身は高い山に行かなかったのも、ペトロたちからこの話を聞いて書き留めたことになります。あるいは、すでに手元にあるマルコ福音書を見ながら書いています。マルコは十二使徒ではありませんが、ペトロのお供をしたので、ペトロの説教をよく聞いていたでしょう。ペトロのキリスト告白に続いている記事、ここに意味があるでしょう。

II モーセとエリヤ

ここは、なぜ、ペトロは、モーセとエリヤだと分かったか興味深いところです。顔を見たことはありませんし、顔写真もありません。今、ここにモーセとエリヤが現れても、顔だけでは分からないでしょう。長い髭を生やしたお爺さんであれば、ユダヤ教徒かイスラム教徒かも分かりません。ただ、聖書物語は聞いていたでしょうから、長い杖を持っていたらモーセ、マントを羽織っていたらエリヤと分かったかもしれません。それは今日、聖書物語に親しむ教会の子供たちも同じです。

なぜ、ペトロは、モーセとエリヤだと分かったか、ヒントは、二人が、イエス様と語り合っていたからでしょう。ペトロ、ヤコブ、ヨハネはひどく眠かったのですが、じつところ覚えて聞いていました。イエス様とモーセとエリヤが何を語り合っていたか、マルコとマ

タイは書いていませんが、ルカは書き記しています。31節「二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。」

マルコはペトロの説教を聞いていたので、この出来事を目撃証人から話を聞いて書いています。そしてマタイとルカは、マルコ福音書を基本にしなが、さらに詳しく書いています。マタイとルカは、さらに詳しく知ろうと思ったら、ペトロ・ヤコブ・ヨハネから聞く以外にないのですが、執筆時点でまだ生存していたとハッキリ言えるのはヨハネだけです。しかも、ヨハネもひどく眠かった三人の一人です。しかし、ルカの場合、復活後のイエス様から念入りな教育を受けたパウロから聞いた可能性もあります。

さて、モーセとエリヤは、何をイエス様と語り合っていたかという、「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」のです。イエスの最期 Exodon autou について話していました。Exodon とは exodus の目的格で、『Exodus』と言えば『出エジプト記』です。そこで「departure 脱出」と訳している英訳もあります。聖書協会共同訳では「最後」としています。「最期」と言えば、死んで終わりなるからでしょう。口語訳も「最後」です。

そして、モーセとエリヤが、「栄光に輝くイエスと」対等の関係で話し合っていたとは思えませんから、「主なるイエスよ（ヤハウエなるイエスよ）、私はイスラエルの民をエジプトの奴隷状態から導き出しました。しかしそれは、あなたが私たちを罪の奴隷状態から救い出してくださることだったのですね」。こう言ったならモーセと分かります。そして、「私はバアルの偽預言者たちに立ち向かいました。一人でも勝てたのは、イエス様、私はあなたのモデルだったからです」と言えばエリヤだと分かります。

この光景を見て、なぜ、ペトロは、小屋を三つ建てようと言ったかは深く考えない方がいいです。33節「ペトロは自分でも何を言っているのか分からなかった」からです。基礎資料のマルコ福音書でも「ペトロはどう言っているか分からなかった」とあります(9:6)。

III なぜイエスの変貌が必要か

それは、人々の噂の中で、弟子たちはイエスを何と言うか、という直前の記事と関係あるからです。群衆は、洗礼者ヨハネが生き返ったのだ、いやエリヤだ、いやいや誰か昔の預言者だ、特に「あの預言者」（「モーセのような預言者」申命記18:15）だと言っていました。人々の噂は人々の期待を表しています。生きたまま天に上げられた奇跡の預言者エリヤの再来、モーセのような大人物の再来、これが人々の噂です。

それに対して、主イエスは「それでは、あなたがたは、私を何者だと言うのか」と、弟子たちにお尋ねになりました。弟子の代表ペトロが、「神からのメシアです」と答えました。弟子たちは、イエスをエリヤでもなくモーセでもなく、「神からのキリスト」と告白したのです。

そこで、高い山で天から聞いた声が、この記事の最大のメッセージです。「これに聞け」。モーセでもエリヤでもなく、「これに聞け」。モーセとエリヤは、旧約聖書の代表、律法と預言者を代表しています。律法と預言者は、キリストを預言し、キリストを待っていました。

だから、モーセとエリヤは、イエスと対等の立場で会議をしていたのではないのです。モーセ律法はキリストの福音を待っていました。預言者たちは皆、エリヤはじめ、キリス

トのことを預言していました。だから、モーセとエリヤは、「イエス様、あなたをお待ちしていました」ということなのです。預言し待望していたキリストが現れたのですから、もう、モーセでもエリヤでもありません。「これは私の子、選ばれた者、これに聞け」なのです。

これに聞く者は、「選ばれた者」に結ばれてモーセやエリヤと共に一つの姿になります。マルコ福音書ではイエスの「姿が変りmetemorphoothee」と言っていて「服は真っ白に輝き」と言っているところを、マタイ福音書では主の「姿が変わったmetemorphoothee」と言っていて「顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった」と言っています。ここをルカは、29節「顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた」と言っています。マルコは姿・服、マタイは姿・顔・服、ルカは顔・服です。ここは、マタイが分かりいいでしょう。顔と服が変わって姿が変わったのです。黙示録のような表現ですが、キリストの弟子はキリストの姿に変えられていきます。

本来、神の子であられる方の姿が人間の姿になっておられたことの方が、不自然な変貌でありました。だから、主の変貌は私たちの変身のためです。主の「姿が変わった」metemorphootheeは、私たちが地上の姿から天上の姿に変身するためです。私たちがキリストのかたちに似せて新たに造りかえられるためです。神の子イエスと同じ神性を持つのではありませんが、神の子の姿に「変身」させられるためなのです。

主は私たちのために、二度変身されました。一回目は低い状態の変身、神の御子が人となって、人の罪を贖うための変身です。クリスマスと十字架＝受肉と死。二回目は高い状態の変身、人の体を持って復活された救い主が、神の右に着座して万物の王となる変身です。イースターとペンテコステ＝復活と昇天。

主イエスの変身の意味は、私たちが神の子らとなって共に王座に着くためです。私たちは一度だけ変身させられます。世の終わりに、再臨の主が救いの完成を成し遂げられるとき、この罪の体は栄光の聖なる姿に変えられます。だから、今は仮の宿であるこの体は、その完成を目指しています。それを目指している者らしく地上生涯を歩もう。キリストのかたちに作り変えられる自分を喜ぼう。罪人から神の子となる自分を喜ぼう。

祈り

神がお送りくださった天よりの主イエスは、神が人となるというへりくだりであり、十字架の死に至るまで低く下られたことを、頭を垂れつつ感謝します。

死に至るまで従順であられた主イエスをあなたは三日目によみがえらせ、復活の輝きと共に天に引き上げられたことを、私たちの希望と思い、感謝。

主の変貌は、私たちが、罪人の姿から復活の主と同じ姿に変わるためであったことを、心から感謝。

この大きな喜びのメッセージである聖書から、いつもキリストの御声を聞いていることができますように。また、この大きな喜びのメッセージを、世の人々に伝えることができますように。

祈り

神がお送りくださった天よりの主イエスは、神が人となるというへりくだりであり、十字架の死に至るまで変わり果てた罪人の姿になるほど低く下られたことを、頭を垂れつつ感謝します。

死に至るまで従順であられた主イエスをあなたは三日目によみがえらせ、復活の輝きと共に天に引き上げられたことを、私たちの希望と思い、感謝。

主の変貌は、私たちが、変わり果てた罪人の姿から復活の輝かしい姿に変わるためであったことを、心から感謝。

この大きな感謝にふさわしい地上生活の歩みを導いてください。すでに与えられた永遠の命の約束によって、栄光の変身の輝きを目指しつつ歩む、地上生涯の聖化の道を導いてください。

II. 場面

III なぜイエスの姿が変わる記事が必要か。

IV 「これに聞け」

1. ペトロたちが高い山で天から聞いた声が、きょう聴くべき最大のメッセージ。だが、IIペトロ1:17は、その大切な一言が抜けている。

「荘厳な栄光の中から、「これは私の愛する子。私の心に適う者」というような声があつて、・・・」。

マタイにはちゃんと伝えたのに、自分はどう覚え。「というような声があつて」の中には、「これに聞け」というのがあつた。

モーセでもエリヤでもなく、「これに聞け」。

モーセとエリヤは、旧約聖書の代表者。律法と預言者の代表。

律法と預言者は、キリストを預言し、キリストを待っていた。

だから、モーセとエリヤはイエスと会って語り合っていたが、対等の関係で会議を

していたのではない。

「イエス様、あなたをお待ちしていました」。

モーセ：律法はキリストの福音を待ちました。

エリヤ：預言者たちは皆、あなたのことを預言して待ちました。

お待ちしていたキリストが現れたのだから、もう、モーセでもエリヤでもなく、「これに聞け」。

2. そもそも、この場面は、人々がイエスのことをいろいろ噂している中で、「あなたがたは私を何というか」と、イエスから弟子たちに聞かれたことから始まっていた。

「洗礼者ヨハネだとか、エリヤだとか、エレミヤだとか、預言者の一人だとか・・・」と弟子たちは答えた。

「預言者の一人」が「あの預言者」と特定される場合は「モーセのような預言者」を意味していた（申命記18：15）。

人々の噂は、当然、預言者みたいな救世主出現の期待を表していた。

イスラエルをエジプトから救ってくれたモーセのような大人物か。生きたまま天に上げられた奇跡の預言者エリヤの再来か。

弟子の代表ペトロは「預言者」ではなく「あなたこそキリスト」と。

イエスをエリヤでもなくモーセでもなく、メシアと告白した。

そこでそのあと、イエスは彼らをモーセとエリヤに会わせた。

すると「これは私の愛する子、私の心に適う者、これに聴け」と天からの声があった。

モーセとエリヤも、「これは私の愛する子」とまで言われたことはない。イエスだけが天からの神の独り子。

モーセとエリヤも、本当の救い主を待ち望んでいた人間。

モーセ律法はキリストの福音を待ち望んでいた。

エリヤたち預言者は、キリストが現れるのを待ち望んでいた。

律法も預言も、聖書全体がイエスをキリストと証言していた。

だから、「これに聴け」は、聖書全体から「これに聴け」。

だから、聖書全体から聖書真理の体系的学びを喜ぼう。

聖書から天の声を聴こう。天の声を聴きつつ、キリストのかたちに作り変えられていく自分の姿を喜ぼう。

罪人から神の子となる自分を喜ぼう。

私たちは世の終りに一度だけ変身することが約束されている。

再臨の主が救いの完成を成し遂げられるとき、この罪の体は栄光の姿に変えられる。聖なる神の子に似た姿に。

だから、今は仮の宿であるこの体は、その完成を目指している。

その意味で地上の体にも意味がある。

第一の創造は第二の創造を目指す。

完成を目指しつつ地上生涯を歩もう。

神がお送りくださった天よりの主イエスは、神が人となるというへりくだりであり、十字架の死に至るまで変わり果てた罪人の姿になるほど低く下られたことを、頭を垂れつつ感謝します。

死に至るまで従順であられた主イエスを、あなたは三日目によみがえらせ、復活の輝きと共に天に引き上げられました。このことを、私たちの唯一の確かな希望と思い、感謝。

主の変貌は、私たちが、変わり果てた罪人の姿から復活の輝かしい姿に変わるためであったことを感謝。罪人の姿から復活の主と同じ姿に変えられ、神の子として共に王座に着かせていただくためであったことを、心から感謝。

この大きな感謝にふさわしい地上生活の歩みを導いてください。すでに国籍は天にあり、永遠の命の約束によって、神の子の特権を与えられていますから、地上生涯を神の子らの使命と任務にふさわしく導いてください。

この大きな喜びのメッセージである聖書から、天の声、キリストの御声を聞いていることができますように。また、この大きな喜びのメッセージを、愛する人々によく伝えることができますように。

I あなたがたは私を何者だと言うのか

18節「群衆は私のことを何者だと言っているか」。これが、まず神の御子からの問いかけ、天からの啓示です。それは「イエスがひとりで祈っておられた時」です。祈りというのは、人間が神に祈るのであって、神が神に祈るのではありません。ですから、ここでは、神の御子が父なる神に祈っているのではないのです。私たちと同じ人間になられたイエスが神に祈っておられるのです。

人間イエスとなって、救い主キリストの働きをすることは、簡単ではありませんでした。嵐を静め、悪霊を追い出すことは、神の御子の神わざですから、難しくはないでしょう。人間となって、人間の罪のために十字架に架かることは簡単なことではありませんでした。さらに、人間の信仰のために正しい信仰告白を導くことは、簡単なことではありませんでした。いろんな噂の中で、群衆が間違ったメシア像に向かうよう、サタンは働きかけていたからです。

だから弟子たちを誤った信仰告白から守ることは、実は難しいことでした。サタンはイエスのことを「神の子、神の子」と言って、神の子が人間になったことの意味を分からなくさせようとしていたからです。ですから、「イエスがひとりで祈っておられた時」は、ここだけではありません。しばしば群衆から退いて祈っておられました。人間イエスが神の子キリストとして、正しくミッションを成し遂げるためでした。

「群衆は私のことを何者だと言っているか」と尋ねられて、弟子たちは答えました。19節「洗礼者ヨハネだ」、「ほかに預言者エリヤだ」、「誰か昔の預言者が生き返ったのだ」と言っていますと。「それではあなたがたは私を何者だと言うのか」と20節。これが、神の子イエス・キリストからの呼びかけですが、これ自体、神の啓示です。

イエスの問いに答えたのはリーダー格のペトロでした。「神からのメシアです。」正解

でした。正しい信仰告白なくしてクリスチャンは生まれません。イエスを「神からのメシア」と告白しない所に、キリストの教会は立ちません。イエスを偉大な宗教家と言う程度ではキリスト者もキリスト教会も起こらないのです。そして、人間の告白は、神の言葉によって養われなければ、正しい告白としてあり続けることはできませんから、告白者は聖書を学び続ける必要があるのです。今日の弟子も。

II 神からのメシア

「神からのメシアです」というこの告白者は、告白者たちです。イエスは「あなたがた」と聞かれたからです。だから、ペトロは弟子たちを代表して告白したのであって、ペトロだけの告白ではありません。つまり、ペトロの告白は、今日に至るまで、全クリスチャンの告白です。教会はイエスをキリストと告白する者たちの集まりなのです。

教会は、何の上に建てられるか、これをマタイ福音書から補足しておきましょう。ペトロの告白の内容に関してルカは触れないのですが、マタイが詳しく語ってくれます。

「あなたこそキリストです」と告白したペトロに、イエス様は「この岩(ペトラ)の上に私の教会を立てよう」と言われました。

ローマ・カトリック教会は、この岩とはペトロのことだから、ペトロの上に教会が立てられるのだから、ペトロの後継者の上にキリストの教会が立てられる、としてきました。そして、それはローマの教会の司教=ローマ法王だとしてきました。

従来のプロテスタントは、ペトロではなく、ペトロの信仰告白だとしてきました。「あなたこそキリストです」という信仰告白の上に教会は立てられるとしてきました。最近、あるプロテスタントの聖書学者は、岩とは神の啓示だと言いました。

ペトロは、「あなたこそキリストです」と言いながら、イエス様が「メシアは死んで復活する」と言われると、そんなはずはないと否定しました。こんな中身のないキリスト告白の上に教会を立てることなどできない。確かなのは、ペトロの告白を現したのは「人間ではなく、私の天の父なのだ」と言われた主イエスの言葉にある。つまり、啓示だ。のちにキリストの十字架と復活のあと、中身が伴うようになった。だから、教会は神の啓示の上に立てられる、と言うのです。

最近のあるプロテスタントの牧師は、聖書啓示・信仰告白・信仰者、どれが欠けても岩にならないのではないかと言いました。すなわち、ペテロの告白であるが、告白するペトロ自身でもある。告白と告白者は切り離せない。信仰告白はあるが信者はいない教会など考えられない。そしてもちろん、キリスト教会とキリスト者は、聖書のみの上に立つのです。礼拝では、まさに神の言葉と人間の賛美・告白が交流しています。啓示・告白・告白者、この三者は切り離せません。この三つが生きた関係でしっかりと組み合わさっていると、キリストの教会となります。

III メシアの秘密

特に癒された人、悪霊を追い出していただいた人に、主イエスは「誰にも言わないように」と命じられました。メシアの秘密は、福音書の通奏低音のように、響いています。ここでも、21節「イエスは弟子たちを戒め、このことを誰にも話さないように命じて、次のように言われた。『人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている』」つまり、十字架と復活まで

は秘密なのです。

世間のメシア待望とは違う、本当のメシアの真相を知るのは、サタンだけでした。ユダヤ人の通常のメシア像は、ダビデ王のイメージです。通常、人間がイメージする救世主は、民族の解放者、国家存亡の危機で活躍する英雄、地球存亡の危機でエイリアンと戦うヒーローです。この世の王様です。神のことを思わない人間的メシア像です。

しかし、神がお与えになるメシアは、罪からの救い主です。神は人間を救うために、罪の代価を支払って永遠の命を与えようとしておられます。そのために、神の御子を人間の姿にしてこの世に遣わされました。だから、イエスはキリストの受難と復活を予告されました。ルカ福音書には書いてないのですが、ペトロはそれを否定しました。しかし、わざと神の邪魔をしようとしているのは人間ではなく、サタンです。だから、ペトロの危ういキリスト告白に滑り込もうとするサタンに対して、「サタン、引き下がれ」と言われました。

IV 自分の十字架を背負って私に従いなさい

ペトロを含む弟子たちに命じられたことは、今日の弟子たちにも命じられていることです。全世界と自分の命を考えてみよ。地球存亡の危機を救うヒーローがいたとしても、地球そのものが宇宙と共に寿命があり、滅びる定めだとしたら何になるか。ましてや、民族とか国家の救世主がいたところで、世界が滅びたら何になるか。世界と歴史と自分には永遠の意味と価値があるのか。あるとしたら誰が与えるのか。

広い宇宙で小さな一点にすぎない自分。そんな自分が永遠を手に入れるチャンスがあるとしたら、天地宇宙の創造者から以外ではありえない。今まさに創造者から遣わされた救世主が、十字架と復活のわざを成し遂げて、あなたに救いと命をもたらそうとしている。

ペトロたちは、イエスが受難予告されたとき、受難は十分ありうることは承知していました。エルサレムから律法学者・ファリサイ派・サドカイ派が、暗殺計画をもって、次々と来るようになっていたからです。ペトロの否定には、自分の命に対する恐怖感もあったでしょう。イエスは弟子たちの恐怖感をも知って言われました。「私について来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、私に従いなさい」。

私たちの罪のための十字架は、キリストが負ってくださいます。キリストの十字架を負える者はキリスト以外にいません。そこで「自分の十字架」とは何だろうかと考え込んでしまいますが、イエスの言われることは一つです。「私について来たい者は、私に命をかけなさい」。弟子たちの恐怖感を十分知りながら、その一つのことを繰り返して言われました。「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、私のために命を失う者は、それを救うのである。」

「自分を捨て」も、自分のエゴを捨てることだろうかとは勘違いしてはいけません。「キリストのために命を失う者となれ」という意味です。もちろん、ペトロが、自分だけは裏切らないと言い張りながら裏切ることはご存知です。弟子たちが皆逃げますが、十字架と復活の後、命をかけてキリストに従う者となることをご存知です。

ここで、ルカは、イエスに従って殉教した者たちがいることを知って書いています。ルカ文書第二巻『使徒言行録』で、そのリストを書く準備もできているからです。すでにキリストの十字架から30年。クリスチャンへの迫害がユダヤ教からローマ帝国になりつつあ

る時です。だから、キリストが弟子たちに言われたことを、パウロの説教からも聞きながら、福音書を書いて語りかけています。キリストを信じる信仰に命をかけよ。キリストに従うゆえに命を失う者は、命を得ることになる。

しかし、信仰に命をかけない者がいることも、イエスをご存知です。だから主は、キリストの言葉を恥じる者、キリストに命をかけない者がいること、裏切り者がいることを予告しておられます。ユダヤ民族の栄光あるメシアを期待して、十字架に架かる恥ずかしいメシアを期待しない者がいました。

今、私たちが置かれている世界も、民族主義と国家主義が非常に強くなっている時代です。今日（こんにち）も、イエスをキリストと告白することは、命がけです。そして実際、主イエスは私たち弟子のために、命をかけてくださいました。